

人権教育に関する特色ある実践事例

基準の観点	学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが組織的かつ効果的に進められている実践事例
-------	--

1. 基本情報

○都道府県名及び市町村

山形県飽海郡遊佐町

○学校名

遊佐町立遊佐中学校

○学校の URL

なし

2. 学校紹介

○学級数

【通常の学級】 1 学年： 4 学級 2 学年： 4 学級 3 学年： 5 学級

【特別支援学級】 3 学級 【合計】 1 6 学級

○児童生徒数

【全校生徒】 3 8 4 人（平成 2 4 年 1 1 月 1 日現在）

（内訳 1 学年： 1 1 7 人 2 学年： 1 2 7 人 3 学年： 1 4 0 人）

○学校の教育目標、人権教育に関する目標

【学校の教育目標】

「心豊かな生徒」「創造力に富む生徒」「たくましい生徒」

今年度の重点テーマ「自律と社会貢献」

【人権教育に関する目標】

「自他を尊重しあう生徒の育成」

○人権教育にかかる取組の全体概要

- ① 地域素材（自然・文化・人材など）の活用の仕方を探る。
 - ・ 海岸清掃や砂防林整備学習等を通して、生命のつながりに気づかせるとともに、肯定的自己理解と自己有用感、社会に貢献する態度を育てる。
 - ・ 町内の職場で職業体験を行い、価値ある生き方を考えさせる。
- ② 協力し合って活動し、課題解決に取り組む生徒を育む。
 - ・ 班会、班長会、学級会を定例で開催し、生徒会活動につなげながら自らの生活を自ら律することのできる生徒を育てる。
 - ・ 人権尊重の理念に立ち、生徒指導の三機能を意識した学年・学級経営に努め、個性が発揮できる集団作りを目指す。
- ③ 「いのち」の教育を推進し、道徳等の指導のあり方を探る。
 - ・ 道徳の時間の指導の充実を図りながら、教育活動全体を通して自分を律し他を思いやる心などの豊かな人間性の育成に努める。

3. 特色ある実践事例の内容

◆海岸清掃や砂防林整備学習等を通して、生命のつながりを知るとともに、肯定的自己理解と自己有用感、社会に貢献する態度を育てる取組

(取組のねらいや目的)

町内の海岸清掃活動や砂防林伐採等の整備学習、職場体験を通して、自然や環境を守る大切さや生命のつながりを体験的に学ばせる。また、地域環境の整備に携わるボランティアの方や職業人との交流を通して、社会の構成員として共に生きる心を養い、奉仕の心や社会に貢献する態度を育てる。

(取組の内容)

○海岸清掃

6月、1年生全員が町内の西浜海岸において、遊佐高校1年生、西遊佐小学校全校児童と合同で、町内の環境推進委員とともに海水浴シーズン前の清掃活動を実施。清掃は、小・中・高校が縦割りの10班編成で、異学年が交流しながら行う。



○砂防林整備学習

9月に、3年生が事前学習として、県森林整備部局の職員を招聘し、「砂丘林」と「松くい虫」について講話を受ける。

10月、町内海岸にあるクロマツの砂防林の、伐採、枝打ち、下刈りを行う。作業には、県、町、森林管理署、森林組合等各団体から、50人以上の指導員を派遣していただき実施している。

○職場体験学習

6月より、2年生が準備学習を初め、マナー講師を招聘しての挨拶や応対に関する講習会や、体験先への事前訪問などを行った。

10月に、生徒の希望に合わせた40班の編成で、町内の事業所で3日間の体験学習を行う。

◆協力し合って活動し、課題解決に取り組む生徒を育む取組

(取組のねらいや目的)

より良い集団生活や人間関係を築くため、話し合い活動などによりコミュニケーション能力を身に付けながら、生活にかかわる諸問題や、生徒の発達の課題に即した諸課題を解決しようとする自主的、実践的な態度を育てる。

(取組の内容)

○学級集団の傾向を把握するためのアンケートの活用

全校生徒を対象に学級集団の傾向を把握するためのアンケートを実施し、学級全体と生徒個々の満足度や学校生活に対する意欲の状況を客観的に把握し、

学級経営の指針や生徒の対応の資料とする。また、本テストを活用しての温かな人間関係づくりや学級づくりのために外部講師を招いての研修会を開催する。

○班会、班長会、学級会を定例開催

週時程の中に、班会、班長会、学級会を設定する（2週に1回）。学級内の生活をふり返り、課題の抽出や解決策の検討などPDCAサイクルを生かしながら、自らの生活を自ら律することのできる生徒及び学級集団を育てる。

※話し合いの流れ（最初は、進め方のひな型を準備し指導）

- ①班会（水曜日の終わりの会において20分間）指導者：担任
- ②班長会（木曜日の朝の時間15分間）指導者：担任
- ③学級会（金曜日6校時の学級活動の時間）指導者：担任
- ④学年生徒会（必要に応じて実施）指導者：学年主任、学年生徒会担当

◆「いのち」の教育を推進し、道徳等の指導のあり方を探る取組

（取組のねらいや目的）

本県第5次教育振興計画「いのちの教育」を踏まえ、自分を律し他を思いやる心などの豊かな人間性を育成するためには、特に道徳の時間を要とした授業の充実が不可欠と考えられる。生徒が他（生徒、指導者、資料）との「つながり」を意識し、考えや心情を補充・深化・統合させることができる授業づくりを進める。

（取組の内容）

○校内研修の開催

5月、宮城教育大学教職大学院 相澤秀夫教授による模範授業と講義により研修会を実施。

課題の提示や発問の仕方、机間指導のポイント、コミュニケーションの技術や、授業における教師の役割等を研修する。

10月・11月・12月と道徳授業の校内授業研究会を実施する。



○主な実施例

～1年1組における「人権学習」の取組から～

（男子15人、女子14人 計29人）

本クラスでは2学期に、道徳の時間を中心に、学級活動などの時間を利用し、人権尊重に対する理解を深めることをねらいとした「人権学習」に取り組んだ。なお、授業内容については、その都度、学級通信にて保護者へも情報発信を行った。

① 事前調査

- ・「人権」という言葉を聞いたことがありますか。
- ・「人権」の意味が分かりますか。

○人間が生まれながらにもっている人間の権利。自由に話し、自由に行動し誰からも差別を受けない、などの権利を言う。

- ・あなたは、周りから「自分の人権」を大切にされていますか。
- ・あなたは、「まわりの人の人権」を大切にしていますか。

②平成 23 年度人権作文コンクールでの文部科学大臣賞受賞作を用いての学級活動

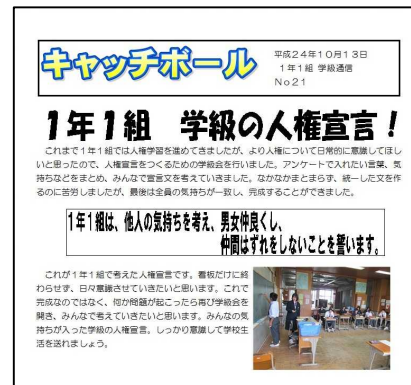
③「虔十公園林」(けんじゅうこうえんりん・宮澤賢治)を題材にしての道徳授業

④自作資料「生きて輝く瞬間を求めて」(生命尊重)を用いて、道徳の校内授業研究

⑤学級活動で学級の人権宣言の策定

「1 年 1 組は、他人の気持ちを考え、男女仲良くし、仲間外れをしないことを誓います。」

⑥人権宣言策定後の意識調査によるフォロー



4. 実践事例の実績、実施による効果

- ・海岸清掃活動、砂防林整備学習等により、多くの生徒が生命の大切さや人とのつながりを強く感じる事ができた。
「一番驚いたのは、体験学習のために沢山の大人の方が来てくれたことです。～略～。実際に林を見て、沢山の木が何百年も前に植えられ、現代まで多くの手がかけられてきたことに気づきました。砂防林があるから、今、快適な暮らしができるのだと思います。私も砂防林がある町の一人として、これからの生活で自然を大切にしていこうと思いました。」(3年生感想より)
- ・班会、学級会等の活動においては、当初は、学級担任に助けを求める姿が見られたが、回を重ねるごとに自主的に運営していく姿が見られた。特に学年が進むにつれその姿は顕著である。
- ・学級集団の傾向を把握するためのアンケート及びその研修により、学級担任は、学級集団及び個人の状態について、日頃の観察や教育相談等から把握した情報に加え、より学級や生徒理解を深める事ができた。
- ・道徳の時間を中心にした授業研究を行うことで、各教科においても他(生徒、指導者、資料・教材)との「つながり」を意識した授業が多くみられるようになった。

5. 実践事例についての評価

○成果

- ・地域社会による体験的な活動が、自然や自他との「つながり」を意識する機会となり、生徒の自己肯定感有用感が高まった。
- ・道徳の時間を中心にして、教科を含めた5回の校内授業研究会が行われた。その中で、いのちの重さを真剣に受け止めた上で、他に対する思いやりや、限りある命を精一杯生きようとする人権意識の高まりが見られた。また、ゆさぶりの発問の工夫や、グループ学習等授業形態の工夫により、生徒のコミュニケーション力が高まってきた。
- ・班会、学級会を充実させることにより、生徒がより積極的に行事等に取り組むようになり、行事等における集団の質の高まりや学校全体での一体感が感じられる。

○今後の課題

- ・今年度は、自己肯定感や責任感など価値的・態度的側面、また、コミュニケーション力など技能的側面の学習が中心となった。今後は、人権の概念や歴史など知識的側面についても充実させ、バランスの良く体系化していくことにより、人権尊重の意識、態度をより一層育成していきたい。

【 人権教育の指導方法等に関する調査研究会議によるコメント 】

遊佐町立遊佐中学校

学校全体として人権尊重の視点に立った学校づくりが、組織的かつ効果的に進められている事例である。

具体的な実践例として、①海岸清掃や砂防林整備学習、職場体験学習、②課題発見力、問題解決力をもった自主的・実践的な人間関係づくり（学級集団づくり）、③道徳の時間が日常指導の補充・深化・統合の場となるような授業づくりの工夫等が紹介されている。特に、①は、小・中・高校の異年齢の班編成、関係諸機関や地域住民との幅広い連携など、本校教育活動に関わる多くの人々の意図的・組織的・計画的な取組拔きに実現しない実践である。②に関しても、実態把握や集団づくりのシステム、組織や時制の工夫、③の研究者との協働、教材開発、授業内容・方法・形態の工夫等の職員研修の積み上げ等、学力形成を下支えする「効果のある学校」づくりの具体的実践として、参考になる。